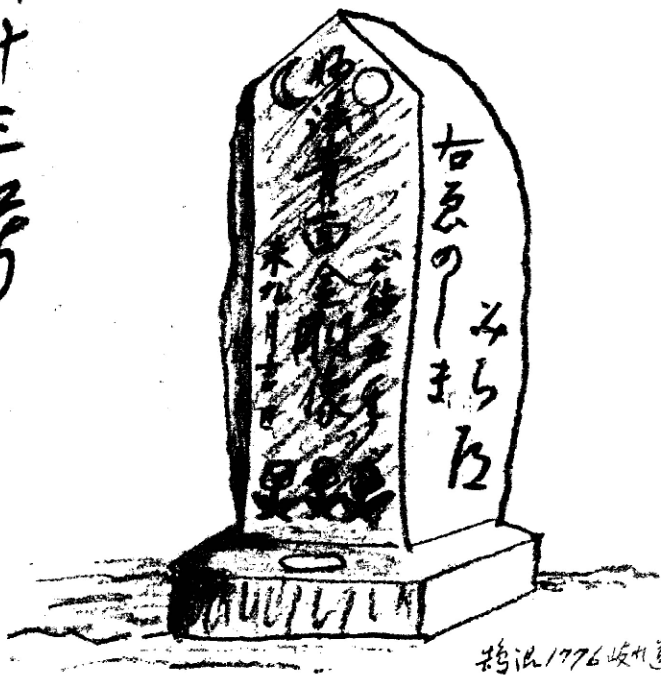


鵠沼

はまゆうと桜具と
海光るわが故里

第十三号

鵠沼を語る会



鵠沼1776 坂州道

「鵜」について

富士 山

去る 1 日の本会で伊藤節堂さんは鵜沼（クゲヌマ）という地名は他県にもあると説明され、その努力には敬服します。
クグイヌマが縮まってクゲヌマとなったということは、昔からある音便からいって当然のことで、たとえ他県になくとも全く間違いないものであります。ただクグイという鳥がどんな鳥かについては私は調べていないので今日は省略します。私の大学時代（大正の初め）頃にはローマ字論が盛んであって、従来の英語から来たヘボン式に対し、日本式ローマ字論が気煙をあげ、鉄道の駅名にもこれを用いて書かれてありました。以下鵜沼のことを音便とローマ字を用いて説明すると理解しやすいと思います。

（１） 鵜沼は *kuginuma* が音便で *Kugenuma* に縮まったものです。同様のことは沢山あります。富山県のくりから峠の下に「石動」とかいた駅があります。これをどう読むか、動を「うごき」とのみ考えては読めません。「ゆるぎ」と読むと *isiyurugi* となり、音便で *iy* がとれて *Isurugi* イスルギとなります。つまり石動はイスルギと読むのです。これをヘボン式で *Ishiyurugi* と書くと *iy* がとれた時には *ishurugi* となり工合が悪い。（追加 動橋 イブリバシ）

同様のことは沢山あります。人名なら富山はトミヤマ *To miyama* ですが、地名になると *mi* が取れてトヤマ *Toyama* となります。黒柳はクロヤナギ *Kuroyanagi* ですが、青柳は *na* がとれてアオヤギ *Aoyagi* となり、地名でヤナイダというのが石川県の能登にあります。（追加 富樫 トガシ）

（２） 鵜の音読みは漢和辞典によるとコクとありコウではあ

りません。それなのに鵜 洋（コウヨウ）小学校、鵜（コウ）
 生園と読むのはどうしたことでしょうか。これは k o k u（コク）
 の k u（ク）がとれて k o（コ）となり、読みにくいから k o（コ）
 と長くなり、k o y o コウヨウ小学校、コウセイ園となったもので
 音便であり、誤りではありません。富士はフジですが、富貴
 はフーキです。（富貴は浮き雲のごとし）

（３） ついでにヘボン式ローマ字と、日本式ローマ字とを比較し、
 それにドイツ式を加えて例示しましょう。

	ヘボン式	日本式	ドイツ式
織 田	O t a	O t a	O t a
太 田	O t a	O t a	O h t a
伊 藤	I t o	I t o	I t o h
糸	I t o	I t o	I t o

このドイツ式をプロ野球の選手のユニホームに使っております。
 日本式ローマ字は英語を根拠としたヘボン式にくらべて日本
 語の発音を表すのに適切です。またドイツ語はフランス語や
 英語にくらべて規則正しく例外というものもはなはだ少なく習得
 しやすいものです。

（終）

江のしま道しるべ考

伊藤節堂

(はじめに)

江のしま道しるべは、杉山検校（検校）（二六一〇～一六九四）が江の島弁財天に対する報賽の一つとして建てたと伝えられている。

数は四十八基建てたといわれるが、現存するものは十一基だけで、その所在は藤沢市史第五篇に記録されている。

また、これとは別に、市教委発行の「藤沢市文化財のしおり」には、昭和四十一年に市の文化財として指定された「江の島弁天道

標」十一基の所在が示されている。

その所在場所と数については、両者に若干の相違はあるが、ともかくもこれらを参考としながら、杉山検校の建てた江のしま道しるべを訪ねることにしよう。

その前にまず、道標の形態や刻字を知っておかねばならない。市役所前の現物を見れば一目瞭然だが、材質は花嵐岩、形は尖頭角柱型、寸法は高さ一一七cm、巾、奥行共に約二四cm、刻字は正面に「えのしまへ」、右側に「一切衆生」、左側に「二生安楽」とある。また、正面上部に梵字一字（弁財天を示す種子^{しゅうじ}）がある。

一、遊行通り三丁目ロータリー 1基

ここは境川に沿って南下する県道鎌倉片瀬
藤沢線と遊行通りとの分岐点であるから、ロ
ータリーは三角地帯である。道標は北の端に
東面して建てられている。高さ一二四cm、巾
二五cm、厚さ二三cm。

またここは、遊行寺橋を起点とした 旧江の
しま道が古い街並を通ってきた、現在の遊行
通りと交わるあたりでもある。江のしま弁天
へのコースは幾つかあるが、ここは「第一の
江のしま道」である。

二、白旗神社 1基（藤沢2丁目四）

白旗神社は源義経を祭神とする。道標のある
場所は社務所の西、神社の山の下で一見むき

苦しい場所である。道路計画などによって、
方々の路傍から、石仏、石神、道標などが何
十となくここに集められた。

その中の一つに「重要文化財」などという
標柱が立てられると、恰も人間が文化勲章を
もらったときのように、ある輝きをもって私
たちの目に映るのである。

高さ一三〇cm、巾二五・二五cm、厚さ二二cm。

三、法照寺 1基（鵜沼神明2丁目2）

江のしま道は引地から入るのがある。その
経路は明確でないが、明治一五年測量の参謀
本部二万分の一地図によれば、次のように
推測することができる。

引地橋の東袂から南下し、万福寺の前を通

る。首塚のところで左に曲がる。東海道本線を踏み切って、普門寺、鵜沼小学校の北側を通る。小田急線を踏み切って中学校の正門

前に出る。鵜沼桜が岡一ノ一七と一ノ一八との間を南下する。つづいて鵜沼桜が岡二ノ六と鵜沼藤が谷四ノ一九との間を南下する。さらに鵜沼藤が谷二ノ六と二ノ七との間を南下し境川に出る。川を渡って片瀬の江のしま道に出る。

この引地―藤が谷のコースを「第2の江のしま道」とよぶことにしよう。

さて、故高橋清一氏の「藤沢市地名私考」によれば「普門寺北側には…江の島道しるべの内―基があり、現在は線路北側の一面に保存せられている」とある。つまり線路予定地

に道標があったわけで、そこは江のしま道と刈田への道が岐れるところではなかったろうか。

その道標は現在、法照寺（勝[△]ではない）境内の一角に東面して建つ。高さ一〇四cm、巾二二cm、厚さ二三cmで、右側面はどういうわけか「二切衆生」と刻す。

四、第三の江しま道（辻堂―堀川）

藤沢市史第五編によれば、江のしま道しるべは、辻堂大野守衛氏の角と、堀川秋山晃禧氏門前との二か所を挙げているが、これは辻堂と堀川との間に「第三の江のしま道」があったことを物語るものである。

恐らくこの道は、茅ヶ崎市小和田から辻堂、

堀川そして、現在の鵜沼海岸三、二、一丁目と南東へ進み、片瀬西浜で潮待ちをしたと考える。潮待ちは鴨長明の歌を挙げるまでもなく「片瀬川は干潮時には三〇センチほどになり渡渉することができた」と古老は語るのである。

さて、道標は、辻堂の一基は、市役所構内に移されたが、他の一基の所在が不明である。

堀川に住む八木竹松氏（八四才）によれば、東京オリンピック以前に、八部公園（鵜沼運動公園）へ通ずる路傍（現在の鵜沼海岸七丁目一三付近）で確かに見たという。そうなりと前述のコースは、第三の江のしま道としていよいよ動かすことができなくなる。

五、市役所構内 二基

市役所の本館正面入口に向かって、左側の木立の下に、杉山道標二基、その他の道標が二基、計四基が北面して並ぶ。

右端が杉山道標で高さ一二〇cm、巾二四cm、厚さ二四cm、三つめも杉山道標で、高さ一一二cm、巾二四cm、厚さ二三cm、この中どれかが辻堂の大野氏角から移されたものである。

六、片瀬小学校正門前 一基

正門前にはちがいないのだが、よく見る小学校と泉蔵寺との境にあたるようだ。

道標は一メートルほど高い位置にあるが、初めは道路上に建てられたもので、その場所は、消防第三分団の前から右に岐かれる道があ

るが、この岐路（片瀬二丁目一七ノ二八）に

東面して建てられていたにちがいない。

高さ一二八cm、巾二四cm。

七、密蔵寺筋向い 一基（片瀬三ノ六ノ五地先）

この道標は江のしま道から右へ岐れる道に

北面して建てられているが、最初は江のしま道に

東面して（片瀬三丁目六ノ五の東側に）

建てられていたと考える。

高さ一一四cm、巾二四cm。

八、片瀬市民センター構内 一基

市民センターの正面に自転車置き場があつて

その後ろ側に建っている。文化財のしおりには

二基となっているが、実際は一基である。

高さ一〇五cm、巾二四cm。

九、西行戻り松 1基（片瀬三ノ一〇ノ一六番地）

片瀬市民センター筋向かいの精肉店脇に西行

戻り松（樹高二・七m、目通径四・五m、黒松）

があつて、その傍に道標がある。

「西行もどりの松」と彫られた面が表に向い

ているが、実はこれが裏で、正面はあくまで

「えのしまへ」と彫った面である。

思うに杉山検校は西行に深く帰依していた

ことから、ゆかりの松の傍に道標を建て、併

せて戻り松の伝承を後世に伝えたかったので

あろう。だからこの一行は表の種子よりも、一段下げて彫らせた。

またこの道標は元は本蓮寺門前三叉路にあったという。松も六代目ということだが、松を植えかえたり、道標を移しかえたりしているうちに、いつのまにか戻り松の方が主役に転じ、今ではおおつぴらに正面を向いているのであろう。

高さ一〇三 cm、巾二三 cm。

一〇、江の島「福石」わき 一基

江の島神社二の鳥居から辺津の宮に向かって石段をのぼると、中腹右側に福石がある。その右手、杉山検校の碑に並んで道標がある。これは江のしま道の道標であったものを、

検校ゆかりの場所に移したのであろう。

高さ一二四 cm、巾二五 cm。

一一、鎌倉市腰越公民館前 一基

腰越公民館の正面道路脇に電話ボックスがあつて、そのうしろ二メートルほどのところに建っている。杉山道標であることは一見してわかる。自然石を台座として建ててある。また、道標は中ほどで折れ、セメントで接いである。

高さ一一八 cm、巾二三 cm、厚さ二四 cm。

腰越支所職員の話では、腰越にも江のしま道があつて、この道標は腰越を流れる神戸川こうどの改修にあたり、支所の前庭に移動した。その後、支所は大通りに新築移転して、そのあ

とが公民館になったという。

藤沢市史第五編には元の位置を「神戸浜道角」と示してあるが、この神戸浜道こそ「第四の江のしま道」ということができる。

一二、造立の原点を考える

さて、この度道標を訪ねながら思ったことは、杉山検校の江の島弁財天に対する深い信仰心と、盲人に対する細かい配慮と導きの心であつた。

検校が道標を建てるに当たっては、まず盲人の誘導を優先したのである。盲人を誘導できれば、健常者はおのずと誘導できるからである。

そのためには、

(一)、石標は同形同寸の尖頭角柱とした。

(二)、高さは人の胸の高さとし、手を差し伸べれば、先頭角柱がたやすく認識できること。

(三)、文字は簡単にし、大きく深く（ほぼ手のひら大）指でなぞれば判読できること。

(四)、正面の文字は平易な仮名文字（当時は変体仮名）とした。

(五)、側面は平易な句を大きく楷書で彫った。

(六)、右側面を「一切衆生」、左側面を「二世安楽」とした。

(七)、岐れ道に建てた。

一三、道標の読み方を考える

つぎに道標の正面の文字はすべて変体仮名で

「えのしまへ」が正しく、「えのしま道」は

誤りである。最下部は「遍」の草体からきた

変体仮名で「道」の草体ではない。

「遍Ⅱへ」を用いた道しるべは市内にいくつもある。例えば市役所前、右から二つ目の道標の左側面に「左龍口へ」とあるのもそれである。

「道」を用いたのもある。例えば市役所前、左端の道標の側面に「弁天江の嶋道」とある。また「みち」「ミち」を用いたのもあるがこれは略す。

さて、道標にはすべて方向を示す文字（左右東西など）や記号（矢印など）があるものだが、この道標にはそれがない。なくても盲人を誘導できたところに、検校の深慮がある。私は「一切衆生、二生安楽」は信仰への導きの言葉であることから、「二生安楽」が

その意義とともに、弁天への導き、つまり進行方向を示すのではないかと考える。

すると道標の建て方、向きが問題になる。そこで道標は常に進行方向の右側に建てなければならぬ。いま私たちは人口過密な近代都市の中でそれを考えているが、江戸時代初期の江のしま道なら、どこへどのように建てるか、という思いのままであつたと私は考えるのである。

（おわりに）

最後に、今回（昭和五五年八月）江のしま道しるべを一巡してわかったことは、現存する杉山道標の数が、藤沢市内に十基、鎌倉市内に一基計十一基であつたこと。

また藤沢市が文化財に指定した道標は、

杉山道標が十基と、杉山以外の道標（市役所
前右から二つ目「従是右江ノ嶋」が一基

計十一基であったことを付記して、この稿を
終わる。
（昭和五五・八・一五記）

（追記）

以上は、昭和五十六年三月一日藤沢中央図
書館発行「わが住む里」第三十二号に登載さ
れたが、この度「鵜沼を語る会」の研究資料
として転記したものである。転記にあたり若
干字句の補正をし、挿図を入れた。

（昭和五八・一・二五記）

（参考）杉山検校 略年表

1610 慶長15 （藤堂高虎の臣、杉山権右衛門重政
の長子として伊勢の国津に生る。

幼名を養慶といった。

1614 慶長19 養慶五才の時失明。

1626 寛永3 養慶一七才のとき江戸へ出る。山瀬

琢一に入門して鍼術を習う。名

を和一と改める。

（年月不明） 和一江の島弁財天に参籠、断食。

満願の日、福石の所で管と鍼くたはりを授

かる。京都に上り鍼しん学を学ぶ。

1673 延宝年中 四代將軍家綱に召され、綱吉の病氣を治す。

功により本所一ツ目の宅及び禄五百石をう
ける。

1692 元禄5・9・9 関東総録検校となる。

1694 元禄7・5・16 病没、享年八十五才。（墓江の島）

＜江のしま道しるべ所在略図＞

「鵜沼を語る会」活動年表

伊藤節堂編

1975
昭和50・5 鵜沼を語る会の設立準備

〃 50・11 鵜沼を語る会第一回会合 参集者

番場定八、福地誠一氏、他

1976
昭和51・7・27 午後一・三〇～三・三〇 第三談話室

「海水浴と鵜沼」その他

〃 51・7・31 機関紙「鵜沼」第一号を発行

(内容)

鵜沼の今昔 — 前鵜沼公民館長

高松敏夫

松露と防風 — 伊藤 昌

鵜沼の厂史(二) — 伊藤 昌

1976
昭和51・9・17 鵜沼の史跡散歩

〃 51・10・29 「鵜沼」第二号を発行

(内容)

鵜沼と私 — 鵜沼公民館長

吉田興一

鵜沼の厂史(二) — 伊藤 昌

明治百年大学生と

史跡を歩く 伊藤 昌

鵜沼海岸と私 — 伊藤 昌

鴨の来る池 — 伊藤 昌

「砂のいろ」 — 抜粋 — 野口喜久子編

1977
昭和52・2・23 午後一・三〇～三・三〇 第三談話室

公民館まつりの参加について

〃 52・2・25 「鵜沼」第三号を発行

(内容)

鵜沼公民館まつり

に見る生涯教育

鵜沼サッカークラブ

鵜沼の厂史(三)

地引き網雑感

私と鵜沼

1977
昭和

52・4・25〜27 鵜沼地区公民館祭りに参加

〃 52・4・21 午後一・三〇〜三・三〇

鵜沼っ子鵜沼を語る

〃 52・6・16 午後一・三〇〜三・三〇

にて集合

〃 52・8・18 午後一・三〇〜三・三〇

にて集合

〃 52・10・20 午後一・三〇〜三・三〇

にて集合

1978
昭和 53・3・22

「鵜沼」第四号を発行

(内容)

鵜沼五十年

鵜沼と私

〃

〃

〃

〃

1979
昭和 54・2・16

経過報告と今年の計画、その他

〃 54・2・22 午後一・三〇〜三・三〇

講演鵜沼の厂史(二)

〃 52・3・1 午後一・三〇〜三・三〇

講演鵜沼の厂史(一)

〃 52・3・7 午後一・三〇〜三・三〇

- 1979
昭和 54・3・17 講演「鵠沼と文学」 伊藤 昌
公民館まつりに参加
- // 54・7・20 午前九・三〇 第二談話室
講演「鵠沼と白樺派」 伊藤 昌
- // 54・7・20 「鵠沼」第五号発行
(内容)
- 芥川文学と鵠沼 | 伊藤 昌
鵠沼と白樺派 | 伊藤 昌
- 鵠沼碑文集(その一〜三) 伊藤節堂
- // 54・9・1 「鵠沼」第六号発行
(内容)
- 関東大震災を想起して | 奥田直元
鵠沼碑文集(その四〜五) 伊藤節堂
- // 54・9・4 午前九・三〇 第一談話室
座談会「鵠沼と震災」

- 1979
昭和 54・10・23 午前九・三〇 公民館集合
鵠沼の史跡を探索した。
- // 54・10・23 「鵠沼」第7号を発行
(内容)
- 鵠沼公民館の
改築にあたって | 伊藤 昌
- 鵠沼碑文集(その六〜一〇) 伊藤節堂
- // 54・12・13 午前一〇時〜正午
相模工業大学教授
- 講演「史跡天然記念物」 中丸和伯
- // 54・12・13 「鵠沼」第八号発行
(内容)
- 長靴と私(一) 伊藤 昌
鵠沼の野草(その一〜二) 伊藤節堂
- 大震災前後からの
鵠沼海岸(二) 高木和男
- 1980
昭和 55・1・10 「鵠沼」第九号発行に当たり会員の原稿募集
題「昭和五十五年を迎えて」 〆切一月二十日

1980
昭和55・1・31

「鵜沼」第九号を発行

(内容)

大震災前後からの鵜沼海岸(二)	高木和男
鵜沼の野草(その三)	伊藤節堂
長靴と私(二)	伊藤 昌
一九八〇年の会員の声	山口三郎
鵜沼の松	須貝 敏
郷土史の研究	川上信康
鵜沼三題	持田まさお
鵜沼風物	太田太郎
春の寿	伊藤 昌
江ノ島の海	花輪 桂
私の江の島神社初詣発願由来	佐藤 清
鵜沼地域を永住地に決めた理由	富永達雄
昭和五十五年を迎えて	大宮三郎

鵜沼と私

富士山^{たかし}

新しいプランを期待する

飯田心美

昭和五十五年を迎えて

鈴木繁太郎

1980
昭和55・2・15 午前一〇時 和室

公民館改築に関する建築委員会の

結果報告 ― 本年の活動について、 他

// 55・6・19 午前九・三〇公民館集合

鵜沼史跡めぐり 午前一〇時出発

石仏、記念碑、晋門寺、皇大神宮

万福寺、空乗寺、大橋重政の墓、他

// 55・6・19 「鵜沼」第十号を発行 ― (内容) ―

大震災前後からの

鵜沼海岸(三)

高木和男

鵜沼碑文集(その一一〜一五)

伊藤節堂

鵜沼の石仏、石神編年表

伊藤節堂

長靴と私(三)

伊藤 昌

1980 昭和 55・10・23 午後一・三〇～三・三〇 第一談話室

(研究発表) 長寿の秘訣 富士山

藤ヶ谷「賀来神社」 伊藤節堂

鵜沼の石仏、石神、

編年表(追補改訂) 伊藤節堂

鵜沼の石仏、石神、資料追加 奥田直元

1981 昭和 56・1・15 「鵜沼」第十一号発行(内容)

鵜沼公民館の完成

と生涯教育時代 伊藤 昌

大震災前後からの

鵜沼海岸(四) 高木和男

芥川龍之介の思い出 富士 山

長靴と私 伊藤 昌

// 56・2・19 午前一〇時 仮設公民館第二談話室

(研究発表)

鵜沼碑文集(改訂版) 伊藤節堂

1981 昭和 56・5・20 午前一〇時 新公民館 図書室

(座談会)「鵜沼の今昔」を語り合う

東久邇宮王子

の遭難碑について 塩沢 務

// 56・7・17 午前一〇時 第二学習室

(研究発表)

鵜沼寺院考と

砥上ヶ原旅情 花輪 桂

// 56・12・17 午前一〇時 第二学習室

(研究発表)

神明様の祭り 伊藤節堂

1982 昭和 57・1・11 午前一〇時 文化活動室

文化財保存の運動を全市に広げる

趣旨の説明と意見交換

// 57・2・22 午前九時 公民館集合、熱海市に開館

のMCA美術館見学入館料一五〇〇円各自負担

1982 昭和 57・5・6 午前一〇時 第一学習室

昭和五十七年度の活動について、その他

// 57・7・20 午前一〇時 文化活動室

(研究発表)

鵜沼の「麗子像」

伊藤節堂

// 57・12・14 午前一〇時 第二学習室

「鵜沼を語る会十年の歩み」編集について

(決議事項) 奇数月の第二火曜日、

午前一〇時を例会とする

1983 昭和 58・1・11 午前一〇時 和室

年頭所感

リーダー 伊藤 昌

会員新年の抱負希望を語る

(研究発表) 鵜沼の「クグヒ」

伊藤節堂

神明様の祭り(追補)

伊藤節堂

1983 昭和 58・1・15 「鵜沼」第一二号を発行

(内容)

年はめぐりて

伊藤 昌

鵜沼の「クグヒ」

伊藤節堂

神明様の祭り

伊藤節堂

神明様の祭り(追補)

伊藤節堂

(あとがき)

昨年十二月の集会で「鵜沼を語る会の歩み」

を編集の事が議せられましたが、途中から入会された

方もかなりおりますので、それらの方々にまず、

創立以来の会の活動状況を知っていただくために

作りました。誤記脱漏もあると思います。ご指摘

下さるようお願いします。

(五八・二・六記)

昭和 5 8 年 3 月 1 5 日

鵠沼を語る会発行

藤沢市鵠沼海岸 2 - 1 0 - 3 4

鵠沼公民館内

電話 3 3 - 2 0 0 1 ・ 2 0 0 2